



令和3年2月大阪府議会(都市住宅常任委員会より)

河川の維持管理における新たな技術の活用

Q. 近年、毎年のように全国各地で大きな水害が発生しており、水害から府民生命・財産を守るためには、河川改修等を進めることはもとより日頃から河川の維持管理にしっかり取り組み治水機能を維持していくことが重要。国においては、「防災・減災・国土強靱化のための5か年加速化対策」が昨年、閣議決定されその中で、「効率的に進めるためのデジタル化等の推進」について示され、河川の維持管理においてもデジタル技術の活用を進めることとされている。そこで大阪府の河川の維持管理においても新たな技術を積極的に取り入れるべきであると考えている。

A. 激甚化・頻発化する水害から府民の生命・財産を守るため河川の治水機能を確保することは、大変重要であり、今後、新たな技術を活用し、高度化・効率化を進めていくことは、必要と認識しています。これまで、航空レーザー測量の試行実施や、コンクリート護岸背面の空洞化調査の技術提案を募っているところ。この護岸に穴をあけて背面の空洞の有無調査につきましては、民間事業者より、護岸表面に電磁波をあて空洞の有無等確認できる提案から、令和3年度にモデル河川を選定して実験を行ない、効果等を確認して参ります。

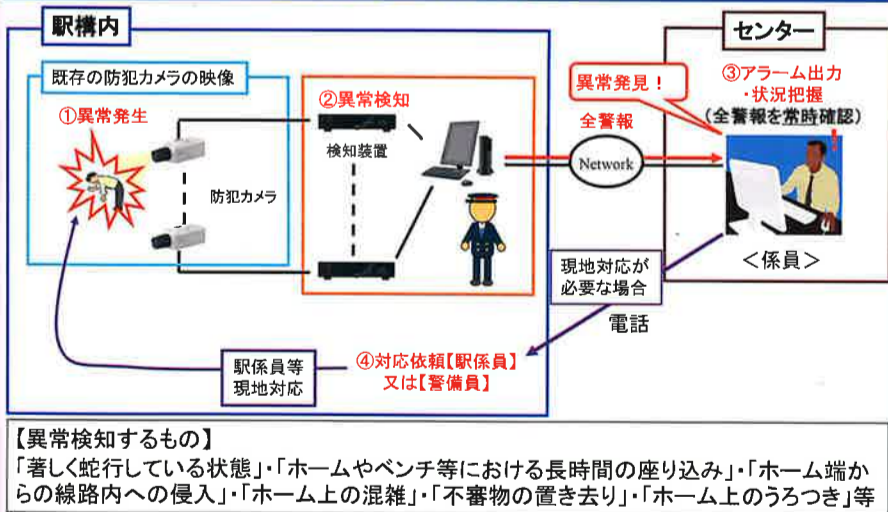


新技術を活用したホームの安全性向上の取り組み

Q. 「人の命を守る政策」として、駅ホームからの転落を未然に防止する可動式ホーム柵の整備促進を訴えてきたところ。現在、一日当たりの利用者10万人以上の駅やホームの混雑、乗換状況、転落の危険性を考慮しながら整備を進めているとのことだが、視覚支援学校等の最寄り駅など真に必要な駅には、まだまだ整備が進んでいない。先日、点字ブロックに貼り付けたQRコードをスマートフォンで読みとり、専用アプリによる音声案内で誘導するという実証実験が行われているという話を聞いた。このような新技術も活用すべきと考える。その他の対策も併せて伺う。

A. ホームからの転落や、列車との接触事故を防ぐためには、可動式ホーム柵の整備が有効ですが、その整備には、多額の費用を要するだけでなく、車両の種類で扉の枚数や位置が異なる場合には、従来型では対応が難しい等から可動式ホーム柵にたよらない対策も重要と認識しています。このため、具体的には、ホーム上のカメラの映像を活用したシステムとして、蛇行歩行や長時間座り込んでいる人をAIが検知すると、駅事務室に通報し対応する仕組みや、視覚障害者がスマホアプリで支援要請を送信すれば、駅員等が受信し、改札口や乗降まで介助を行うものなど、様々に実証実験を行なっているところ。引き続き「可動式ホーム柵整備事業に関する連絡会議」において、新技術導入に向け取り組んで参ります。

遠隔セキュリティカメラシステム



実証実験のイメージ



住吉公園の魅力向上

住吉公園は、明治6年に開設され、再来年に開設150周年を迎える最も古い公園の一つです。公園内には、野球場、テニスコート、又、池や花と水の広場などの修景施設など多くあります。この公園の魅力を高めていくため、民間活力により新たな管理運営制度の導入を取り入れ公園の特色や利用者のニーズに応じていくよう、本年7月に予定しているP-PFI型施設整備にかかる事業者の公募を行い、住吉公園の更なる魅力向上を図って参ります。

イメージ図

